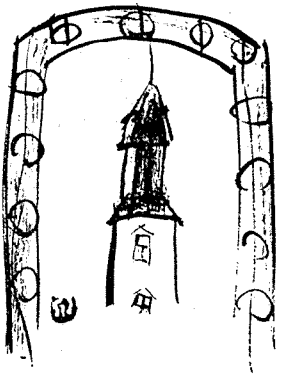


私の学生時代

石川芳次郎

私の学生生活は、明治三十四年二十一才で同志社普通学校（五年制中学校同程度）三年二学期に編入試験をうけて入学し、卒業後第三高等学校を経て京都帝国大学理工学部電気工学科に入学、明治四十三年卒業にいたるまでの生活が私の学生生活といえよう。同志社入学までは独学で働いていた。入学後もかつ働き、かつ学びという生活ではあったが、同志社入学前の私の生活は、波乱重畳ともいえようが、本文の列外であるので略するのがほんとうであろう。

同志社に入った頃の母校は、衰微の極で、生徒も私のクラスは二十人に充たなかったが、しかし、先生の熱心真摯なることまさに火を吹くようで、親切なること慈母のごとしであった。広川先生などは立体幾何の時間に、講義に夢中になって自分の帽子をチョークで真白にしてしまわれたこともあった。福田先生（今なお健在で熊本のユネスコ協会長をしておいでになると記憶する）は生徒に数の暗記方法を教えられて熱心親切であった。私は一生大変な利得をしたと思い感謝している。加藤延年先生は仏さまのような妙好人でありゴッド・マンであった。忠実、親切、ていねいな徳の高い方であった。

中瀬古六郎先生（ドクトル・オブ・フィロソフィー・ジョンズホプキンズ大学理学博士、後に京大の教授になられた）には生理と化学を教えていただいたが、講義が実に面白く極めて有益で、私の一生を通じてのよき生命の糧ともなった。一例を挙げると蛋白質の講義の時にもっとも安価な最良な蛋白質食物は豆腐である。「豆腐の好きなものは幸なり云々」の言葉は豆腐嫌いであった私を豆腐好にしてしまった。豆腐を食べる度に先生を想いだしている。また先生は化学の時間に酸素のところにくると、酸素を初めて発見した人はフランスのラ・ボアジェー（税務官吏――先生はみつぎとりといった）イギリスのプリーストリー（牧師）であったなどのお話を、面白おかしく印象的に話してくださったので今にいたるまで記憶している。その他、数学の権化とも言いてよい秦孝道先生、大塚素先生、村上春太郎先生、米田庄太郎先生（文学博士後京大教授）私はカール・マークスの講義を先生から五年級の時に聞いた。活きのよい美声で耳ざわりのよい講義振りで魅力があった。以上超一級の先生方が少数の学生に講義をしてくれるのだから、学校は衰微していても私達は幸福であった。

これらのえらい先生方は皆独身で、東寮北寮などに学生とともに寄宿舎生活をしていて、学生と一緒の食堂生活であったが不平不満もなく、愉快に学生とともに毎日生甲斐のある良き日を送られていた。今日のようなベース・アップ運動もなく、まことに聖職に生きておられたと申してもよいであろう。まったく清貧に甘んじておられたのだが、身なりはハイカラ（上等ではないが）であった。人間

としてはこういう世の中の方が幸であったかもしれない。私の同志社生活は普通学校であったから、彰栄館内で育てられた。今の建物はずっと大きくなり時計塔がなくなったが、昔は一時間毎にカーン、カーン(Come! Come!)となって、なんとなくひきつけられて思いだしてもなつかしい限りである。チャペルは今も昔と変りはない。

私は毎朝七時半の集りに必ず出た、出席率のよい生徒であったと思い、よかったなあと追憶している。今の本部は図書館で、多分教室が二つ位あったと思う。その教育の思い出としては、山口鋭二先生、洋行帰りの気のきいたハイカラで英読を教えておられた。あるとき文部省の視学官が参観にきたことがあった。先生の美声名調子でナショナル5のリーダーを音叶朗々と読んでみせた。私たち生徒もよい気持であった。

また同じ教室に湯浅吉郎先生(湯浅八郎元総長の長兄)のシェクスピアのマーチャント・オブ・ベニスの講義があった。先生は早稲田の坪内先生とともに我国のシェクスピア研究者であって、劇のセリフ口調で講ぜられるので、実に面白く時間のたつのを忘れていた。今もその名調子のセリフを想い出している。

当時の同志社は学生も少ないし、新島先生は人造りのもととして寄宿舎生活を根本としたのであろう。大部分は寮生活をしたから統制がとれていたようだが、寮長はなかなかきびしくピューリタン生活を要望して、およそ学生たるものは禁酒禁煙はもちろん、純潔な生活であれと、誰になくまことにきびしかった。この良習も生徒の増えるとともに薄れていった。

私の時代に学生が少なくなったのは、同志社は同志社流の教育を主張し、文部省の中学校令によらず教科書も英語はハーパーのリーダー、代数は原書のスミス小代数、ショブネーの幾何、ホブソンの三角、スィントンの万国史等々、中学校で用いる教科書を使わなかった。漢文は孟子・文章規範、国語は徒々草、太平記、大鏡、増鏡、方丈記、その他動植物、生理、地理、地文、物理は日本語の教科書であった。

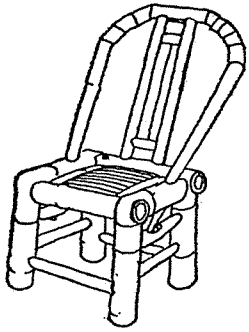
文部省中学校令によらなかったのが、よいか悪いかは定めにくいが、私の場合は同志社流の方がよくはなかったかと今でも思っている。私は同志社を卒業した年に三高の試験を受けて中等の席順で入学ができた。そうすると、無理に中学校令によらなくてもよかったのではないかと思われる。しかし当時は中学校令の学校へ入学していると徴兵の免除があったが、同志社は徴兵免除の特点がなかったので、同志社入学希望者が減っていった。

この当時は同志社は土曜・日曜が休日で、ウィーク・デーは朝八時から午後四時まで、冬でも同じであった。毎日の朝の集りは七時三〇分、私は東九条に住んでいたので、歩いて一時間かかるから六時半に家をでた。私はこの朝の集りは私を改造してくれたと今も感謝していると同時に、よくも約三年間、無欠席で続いたものと自分ながら感心もしている。この当時電車はあったがスピードが遅いのと当時としては電車賃が高かったので徒歩で通学していた。

想いおこせば限りがないが、紙面の関係でまたの機会にしたい。私は同志社時代に人造られの基礎を与えられたものと思っていることを加えて筆をおく。

(京福電鉄会長)

ワン・ゲル
台湾行



中川雍一

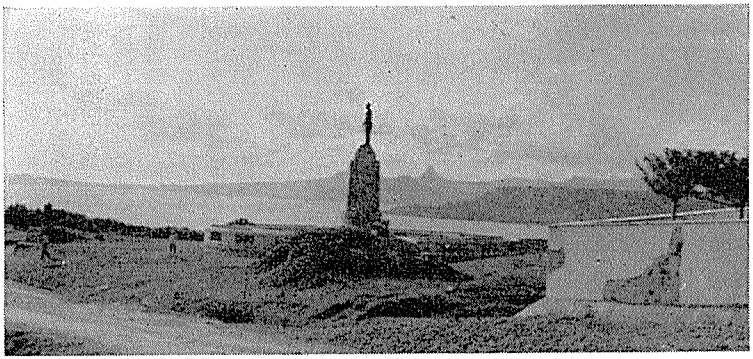
レイと花束をうけて

「たいてい日本語が通用するそうだ。上陸して、あたりを見回しておれば誰かが声をかけてくれるだろう。あとは野となれ山となれ文字通り無宿漂歩はお手のもの」と、のんびり出かけたものだ。ところがバナナボートの四等船室から、ゴキブリのように這い出して眺めた基隆のバースは人の波。船客はほとんど私達だけ。真紅の幔幕は「歓迎同志社大学」と読めてきた。小旗がうち振られる。さあ大変なことになってきた。にわかに威儀を正して微笑をつくり、ゆっくりと手をあげる。船はボロでもこちらは何といいかっこう。フラッシュをあびながら、台湾山岳協会招聘の外国隊第一号、同志社ワンゲルの到着は華やかだった。組まれたスケジュールもものものしい。関係方面へ「おひかえなすって」と仁義をきること、レセプションで一席ぶつこと、何応欣将軍との会見も入っている。山ならばなんとかやれても、外交には弱い。どうか早く歩かせてほしい。

玉山こと新高山

義経号のような機関車が威勢よく湯気を吐く。音の割に急がない。部落で停車すると商人が飛び降り、セメントなんかの小売りをする。勘定がすむ頃やおら汽笛一声。阿里山鉄道というのは愉快な汽車だ。台風のため途中で降ろされてしまう。それでも二千米近くは登っている。さすがの台湾もここまで来ると涼しくなる。さて阿里山から新高の麓へ続く筈の軌道も不通、歩かされるのは構わないが、ポーター代を百円値切るのに一時間かかった。相場だから別に国威は傷つけない。幸い台風の難はのがれた。いよいよ新高山なのだが、明治天皇の命名というのが気にいらないらしく、正しくは玉山という。けだし積雪に輝やくこと玉のごとしの意ならん。台風一過ピッチをあげる。最終の登りの日のことだった。頂上まであとすこしのところで私は疲れきった。なにしろ夜半から歩き続けだ。突然ポーターが……万朶の桜か襟の色……と昔の軍歌を歌いだした。びっくりすると、おまけに一喝「英霊に対して黙禱」ときた。隊長たる者立たざるべからず。「出発ッ」だが他に誰もいない。元気な隊員たちは私の荷物まで背負って遥か彼方へ進んでしまっている。このおっさんは帝国陸軍の出らしい。

コレラの真只中へ



バシー海峡に面し——望郷の総統像

山を下れば西南部。時も時。所も所。あたり一面コレラ菌の放射能がガーガー鳴っているような気がする。ところがいけない。ふんわり漂ようパインの甘い香り、それにバナナ。生もの一切口にせずの壮烈な覚悟はもろくも崩れ去った。はじめ一口、つぎ三口、三度目には腹一杯。道路が遮断され、通行人は注射の証明を示す。両手をあげて消毒液を吹きつけられながら一人ずつ柵の中をくぐり抜ける仕掛けになっている。証明がないとバスにも乗せない。

見事な横貫公路

日拠時代、つまり戦前の日本ができなかった難工事を、独力数年でやってのけたというのが自慢の東西横断道路である。なるほど見事なものだ。道がよいというわけではない。急峻な断崖をくり抜いて三千四百米の高所を車が走っている。富士山を別とすれば日本にこれだけの高さの山はない。道路に沿って山地の開墾が進んでいる。平地との季節のずれを利用して、作物の量と種類を増やすわけだ。人も移住できる、観光バスも走らせようという、綜合開発国府版である。

小学校と警察

人と鶏が一緒に住んでいるような僻地でも小学校は立派だった。学童ははだしだが、揃いの半ズボンで、さっぱりと気持がいい。もうひとつどこへ行ってもデンとしているのは駐在所だ。磨きをかけた標識をたてて、日本の村の比ではない。そういえば台湾の人が戦前を語るとき、一番なつかしがるのは学校の先生で、みそっかすなのは昔の警察だった。何だか暗示的な印象がする。

校友の悲願

台北では同志社校友会が開かれた。家族ぐるみの盛大な集りで、早稲田、日大につぐという。しかし、この母校遥かにひびく校歌ワンパーパスの高らかな合唱も時代とともに低くなり、そしてやがては消てゆくだろう。後継者がないのだ。何とかしてあげることはできないものなのか。単なる感傷の問題ではない。留学生に、日本の間尺を無理強いするのは、もともと話がけちすぎる。さて、それにしても、ビールのコップを握ったまま、いきなり立ち上り「俺達が死んだらこの会はなくなる」と叫んだきり絶句した一校友の眼に、光るものが一粒あったあのときのこと、私は今でも忘れられない。（ワンダーフォーゲル監督）